

京都部落問題 研究資料センター通信

第38号

発行日 2015年1月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告二〇一四年度部落史連続講座Ⅱ

当資料センター主催の「二〇一四年度部落史連続講座パートⅡ」を京都府部落解放センターで、一月一三日、二一日、二八日の三回にわたり開催しました。

各回の講演要旨は次の通りです。尚、詳しくは三月末に発行予定の講演録をご参照ください。

第1回

山室軍平と京都

同志社時代を中心に
講師 山田 保夫さん
(関西学院大学教授)

一九世紀中ごろ、ウィリアム・ブースがロンドンのスラム街でキリスト教の伝道をする中で、貧しい人々の生活支援をすることの必要性を強く感じ、伝道とともに社会事業を行うための「救世軍」を創設した。

救世軍は明治二八年に日本での活動を始める。山室軍平はその年に入隊し、昭和一五年に亡くなるまで日本の救世軍指導者として中心となつて活動を続けた。救世軍をとおして人々へのわかりやすいキリスト教伝道とともに福祉政策

による生活支援を行い「山室の救世軍か救世軍の山室か」といわれるほどの活躍をした。日本での活動は遊郭の女性たちを救済する運動が有名だが、慈善病院、結核療養所の設立、セツルメント事業など、日本ではまだ「社会福祉」という考え方が根付いていない時代に、あらゆる社会事業を先駆的に行っていった。また日本国内だけでなく、満州やアメリカの日本移民の生活支援にまで及んでいた。

こういった山室の救世軍での活動の素地は同志社での学生時代にあった。当時の日記には、底辺の民衆の生活や職業についての記述が各所にあり、貧困問題、社会問題を視野に入れて考えを深めていることがわかる。日記資料や、地元岡山で製作された映像などを使いながら詳しく説明された。

第2回

石井十次と京都・大阪

講師 田中 和男さん
(龍谷大学非常勤講師)

石井十次は一八六五年、宮崎県に生まれ、医師をめざして岡山医

学校で学んでいたが、医師への迷い・挫折の中で、診療所で子どもを預かったことがきっかけで「岡山孤児院」(一八八七年設立)を設立することになる。

孤児院では「活版部」「理髪部」などの労働部門をつくって財源の調達や子どもたちの自活のための活動を行った。また、寄付を募るための音楽隊を作ったり、賛助会員制度を設けたりして積極的な組織化を行い、社会の注目を浴びるようになり、当時の社会福祉事業の力リスマ的な存在でもあった。

彼の有力な支援者には、岡山の財閥出身の大原孫三郎がいた。大原は岡山孤児院への協力だけでなく、倉敷共和会や岡山県協和会という融和運動の組織の会長職にも就いており、部落問題にも関わっている人物である。

大原は石井の死後、院長の跡を継ぐのだが、次第に石井の実践への違和感を持つようになる。孤児を周辺の人々が憐むことで、同情してくれるものだという考えや劣等感を子どもにもたせてしまうのではないか、救いというキリスト教的な考え方自体に問題があるのではないかといった疑問であった。大原は助けるものと助けを受ける

者との関係、差別・被差別の関係にもつながる問題意識を持つていた。そして社会構造を研究するための研究機関として、社会問題関係資料の収集や研究を行う「大原社会問題研究所」を設立することになる。

石井と大原を中心に当時の日記や新聞記事を使いながら報告された。

第3回

近代京都の施薬院

講師 八木 聖弥さん
(京都府立医科大学准教授)

施薬院の歴史は古く、聖徳太子によって作られたといわれる四箇院のなかに出てくる施設である。史料的に裏付けられるのは奈良時代で、光明皇后自らが貧しい人々を救うために施薬院と悲田院を設置したといわれている。

平安時代になっても藤原氏の資金援助の元で運営が続けられていたが、藤原氏の衰退と共に衰亡し廃絶してしまう。

幕末から明治にかけて蘭学を学び活躍した安藤精軒は、施薬院を京都において復興し、慈善事業に生涯を費やした人物である。

明治期、京都には慈善病院とし

て、京都府立医科大学付属病院の源である京都療病院が設置されたが、次第に最先端の西洋医療を施す場となり当初の趣旨とは反して高額医療施設となっていた。

精軒は「医療は仁術」との信念のもと、一八九七年、政界・財界・文化人などから広く寄付を募り、多くの貧しい患者を救うために無料診療を行う「施薬院」を再興する。その時の協力者には柳原町から長年の施療施薬への感謝状を贈られた中村四郎がおり、その養子の正勤と良淳は施薬院の運営にも関わることになる。

寄付に頼る無料診療なので、たちまち資金不足などで経営に行き詰まってしまう。行政の協力を受けることになり精軒は運営から手を引くことになるが、一九一八年に亡くなるまで側面での協力を続けた。

「施薬院」は一九四一年に京都厚生病院と改称し、戦後には京都市に移管され、市立病院に統合される。そして、昭和三〇年代の国民皆保険制度の成立と共に、近代京都の医療を底辺から支えてきたその社会的役割を終えることになったのである。

本の紹介

内田龍史編著

『部落問題と向きあう若者たち』

矢野 亮

(龍谷大学非常勤講師)

最近、気になっていることがある。

ふたたび、ひと昔前のように部落地域において暴力団や悪質な金融、企業、薬物等といった病理が跋扈しないか、とりわけ不安定な雇用状況のなかを漂うしかない若年層のあいだで、人間関係(ネットワーク)までも「食扶持」としてお金に換えてしまうような商売(ビジネス)が蔓延していないかどうか。トラブルが生じた場合に、そこに介入する何がしかの手立てがあるのかどうか。こうした問題は、同和对策事業特別措置法時代にあっても連綿と存在していたが、様々な運動体や事業体、その他のコミュニティによって発見される限りにおいて改善されてきた。しかし、ポスト特措法時代である現在において、こうした問題は「野放し」状態となっており、現在の社会・経済的状况からかんがみて、「病巣」が膨張していてもおかしい。

くはないと懸念している。

こうした私の懸念は、この本の編著者である内田龍史氏らによって二〇〇〇年代に実施された、若年層に対する聞き取り調査や労働実態調査等において、すでに明示されてきた。それら調査結果のデータを再読すればするほど、現状の部落地域において生じている事象に対する不安は増すばかりである。高校を中退し、なかなか仕事に就けない若者がいる。シングルマザーで子どもの養育費をかせぐために水商売をするしかない若者がいる。仕事に不安定かつ低賃金なために結婚できない若者がいる。日雇労働でなんとか凌ぎつつ、失踪したり、ブラック企業でしか雇用されない若者がいる。知人同士でネットワークビジネスに入会し、なんとか生活を維持している若者がいる。

実情を把握したうえで、どうす

ればよいのかと考えているが、なかなか身動きがとれずにいる。そんなことを考えているさなか、出版されたのが本書である。

本書は、ひとことではいえば、部落問題の啓発・学習教材として最適な書である。よくまとまっていって読みやすいし伝わりやすいというのが率直な感想である。昨年、ある大学で「人権論」の講義時の教材として、本書を試行的にもちいてみたとき、受講学生の代表的な反応はこうだった。「まさか、こんな経験をしている人がいると思わなかった」、「部落出身者を初めて見ました」、「いまだに部落差別なんてあると思わなかった」、「顔写真まで出して、語っている若い人たちに勇気づけられました」といった具合である。こうした率直な感想は、義務教育課程で部落問題を学習することがあたりまえだった私にとって意外なものだった。よく考えてみると、受講学生の多くは、一九九〇年代生まれであった。彼・彼女らが生きてきた時代背景は、経済成長が終焉し長期にわたるデフレと不況がつづくなか、阪神淡路や東日本の震災を目のあたりにし、社会では様々な悲惨な事件や出来事を、日常的にメディアをつうじて経験している

いわばポスト経済成長時代に生まれた世代なのである。受講学生の多くが中学校に入学した頃、いわゆる同和对策特措法は終焉した。

以降、学校教育において部落問題を学習する機会は相対的に減少したといつてよいだろう。彼・彼女らが触れる部落にかんする情報は、小学校までの同和・人権教育と家族や友人・知人、メディアを通じてのものである。それだけしかないのである。また、ポスト経済成長時代に生まれた若者世代の親たちは、大阪の橋下市長に代表されるようなバブル経済を謳歌した世代であり、そもそも世代間で相当な時代感覚のギャップがあることは想像にむずかしくない。家庭での親子の対話が成立しているとは考えにくいのである。

受講学生である彼・彼女らの本書にたいする反応（感想）から気づかされたことは、彼・彼女らの親世代とは対照的に、若者世代がそもそも「部落」という概念すら知らない状態にあるということだった。彼・彼女らからみれば、本書は、「あれもないし、これもない」という読みものではなく、「あれもあるし、これもある」という新たな情報がつまった一冊として読まれるものだろう。このような若

者世代の現状という文脈において本書は、部落問題の啓発・学習教材として最適な書なのである。

タイトルからわかるように、編著者たちも若者世代に対する啓発効果を意識し、部落問題をめぐる諸個人の現状と、そこに関与する研究（者）が直面している諸問題とを巧く構成し、表現している。以下では、本書全体の目次をしめし、概要について述べる。そのうえでとりわけ、編著者たちも意図している本書の啓発効果について、私なりに惹起した問いについて整理しておく。

序章 三つの出会い（内田龍史）

・インタビュー「若い子に伝えたことがある」（石井眞澄・石井千晶）

・原稿執筆「出会いからエネルギーが湧いてくる―「阿賀ルネサンス」に学んだ私の解放運動」（川崎那恵）

・インタビュー「違和感からライフワークへ」（上川多実）

・インタビュー「どこに行っても仲間がいる」（宮崎懐良）

・インタビュー「青年がとにかく集まれる場を」（長門実）

・インタビュー「下の世代の兄ちゃんになる」（宮崎懐良・長門実）

・インタビュー「小説は部落問題を伝えるツール」（玉田崇二）

・インタビュー「活動と子育てににおけるジレンマ」（浦田舞）

・インタビュー「祖母から母、そして私がつなぐ解放運動」（副島麻友子）

・インタビュー「一〇年たって話せるように」（藤田真一）

・インタビュー「人をたいせつに生きていきたい」（今村力）

・インタビュー「もっと早く知りたかった」（本江優子）

・インタビュー「穢れ意識をなくしたい」（宮内礼治）

・インタビュー「きょうだいたちは私が守る」（渡辺龍虎）

・インタビュー「ダブルの私から見える部落問題」（瀬戸 徐 映里奈）

・インタビュー「差別に殺されてほしくない」（政平烈士）

終章 部落問題を語ることの困難とその可能性（内田龍史）

目次のとおり、本書は一五名の当事者へのインタビューと一原稿（全一六タイトル、二四七頁）から成り、終章において「部落問題を語ることの困難とその可能性」というタイトルで、編著者が「インタビューなどを補完する意味で、

いくつかの資料と分析をもとに、部落出身であること、あるいは部落問題を他者に語ろうとする若者世代が、何と向きあっているのか／何と向きあわざるをえないのか」を実証的に論じる、という構成をとっている。この目次にみられる工夫は、個別の証言が *essay* にならないようにという構成上の配慮である。つまり、通常、マクロデータを序章に提示したうえで、個別の証言が提示されることが多いが、本書ではあえてマクロデータを終章に配置しているのである。各人の証言を本書の中心とすることに、証言の個別性を重視したうえで、マクロデータが読み手の理解をさらに促すという効果をもっているといえる。

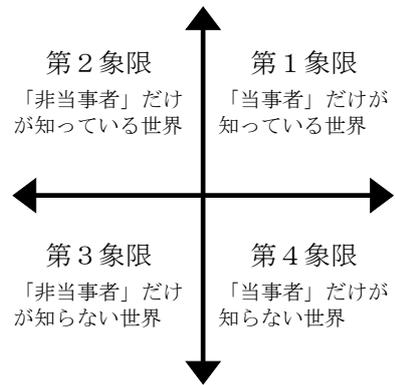
つぎに、概要について紹介しておこう。本書は「二〇〇九年から二〇一二年にかけて、雑誌『部落解放』に連載された特集「部落問題と向きあう若者たち」を、単行本として再録・再構成したもの」（1頁）である。本書の目的（企画）は「部落問題と向きあう（人の魅力という可能性）から部落問題の現状を伝えること」（1頁）である。そこへと向かう編著者の（意思）として、第一に、「「部落の人」というカテゴリーのみでとらえら

れてしまい、十把一絡げに、しかも否定的に評価されてしまう」（1、2頁）という社会があること、第二に、こうした社会に対して、差別撤廃をめざす部落解放運動は、自分たちの要求を社会に認めさせるために、いわば「自分たち」として「一枚岩の団結」（2頁）を優先させてきたこと、第三に、これらの結果として「個々の多様性を表出させることが困難になる傾向」（2頁）が産出されるといふ事態を前提としつつ、「一人ひとりに自分の人生があり、さまざまな課題と向きあいながら生きていくという当たり前のこと。そのことを少しでも知ってもらえば、部落差別の撤廃・部落問題の解決に向かっていくのではないか。」（2頁）といふ、いわば「試みの書」である。編著者は、こうした（試み）にいたった背景（動機）として、序章のタイトルである「三つの出会い」をあげる。それは「接触理論」、「映画『阿賀に生きる』」、「当事者との出会い」である。編著者自身は、この「三つの出会い」を通じて、「部落問題と向きあう」にいたる自らの動機がはぐくまれたと述べる。そして、いかにしてこうした「当事者との出会い」といふ自身の経験が可能になったの

か、という（状況）へと目を向け、という（状況）へと目を向け、接触理論にもとづく幾つかの調査結果から得られた知見データからだけでなく、「当事者との出会い」こそが、編著者にとって、とりわけ重要な経験だったのである。「当事者」と出会わなければ、編著者自身が「部落問題と向きあう」ことも研究することも容易ではなかつたと考えている。従って本書は、「当事者からのカムアウト」（5頁）を前提として求めるものである。また、読者にも当事者と出会うことを求めるものでもある。このことは、「本書には素敵な当事者と出会って欲しいという意図が込められている。本書の最大の特徴は、本人の名前・生年・写真が掲載されており、そのうえで自分の生活史、ライフヒストリーが語られている点にある。」（5頁）と、編著者自身が述べている通りである。本書は、編著者の理論的・経験的スタンスから構成された作品なのである。

目次は、先にみたとおりである。本書に収録されたインタビューと原稿のすべてにコメントすること、は時間と紙幅の関係上、とうてい無理なので差しひかえる。それぞれ読みごたえのある証言記録と原稿については、貴重な現代の証言記録集として学習教材として活用するなかで今後考えていくこととし、むしろここでは、本書の啓発効果について私なりに考えさせられた点を記しておこう。

本書は、啓発という意味において、タイトル「部落問題と向きあう若者たち」とあるように、「部落問題と向き合わない若者たち」に向けた（にとつての）良書である。いかにして現在の若者たちに読ませるか、メッセージを伝えるかに主眼がある。そのため、多くの語り手の「顔」が映し出される。「本書の最大の特徴は、本人の名前・生年・写真が掲載されており、そのうえで自分の生活史、ライフヒストリーが語られている点にある。」（5頁）と編著者が述べているように、このことは、読ませる・出会わせる・触れ合わせるといふ啓発上の戦略として、重要なのである。本書のねらいである、情報をいかにうまく伝えるのかという啓発効果（「伝えにくい問題をいかにして伝えていくのか」（231頁））を考えるために、あえて「当事者」と「非当事者」、「知っている」と「知らない」、というふうな生活世界を象限区分してみると、以下のように整理できるだろう。



編著者が序章において自身の問題意識の源泉について述べているように、編著者自身は、本書にいきつくまでに少なくとも次のような象限（世界）間の移動を経験してきた。それは、【第3象限】（「非当事者」だけが知らない世界）→【第1象限】（「当事者」だけが知っている世界）→【第2象限】（「非当事者」だけが知っている世界）→【第4象限】（「当事者」だけが知らない世界）である。こうした経験の仕方、それ自体の良し悪しについて問うのは愚かである。むしろ、読者でもある私たち「当事者」は、編著者が本書で述べている問題意識の道程とその射程から導出された（社会）の捉えかたこそを学ぶ必要が

あるのだ。【第3象限】と【第4象限】、すなわち、当事者と非当事者とお互いにお互いのことを「知らない」でいられる世界をいかにして克服するのか。編著者の場合には、これらの間に【第1象限】から【第2象限】へ移行する過程（体験）があり、とりわけ、「当事者との出会い」という【第1象限】が、重要な問題意識の源泉（体験）として位置づけられていた。そして残念ながら、【第1象限】だけでは社会問題としての部落問題が解決しないこと、すなわち、【第2象限】と【第4象限】が在ることを、終章（229～247頁）で補足として提起するのである。

終章では、編著者がこれまでに実施してきた様々な調査結果から「部落出身者との付き合いがある層のほうが、部落出身者に対する結婚忌避の態度をとらない傾向がある」（2頁）という知見をデータで明示しつつ紹介している。また、「若年層ほど結婚忌避の態度をとらない傾向も確認」（236頁）できると指摘する。しかし他方で、「寝た子を起こすな論・部落分散論」（239頁）や「公正世界仮説」（242頁）、さらには「圧倒的な無理解」（243頁）等によって、「部落外の人びとにとって、部落差別が遠く感じられる」（239頁）こと、すなわち、部落差別があるにもかかわらずリアリティがない問題となっていることに懸念を込めている。

以上をふまえたうえで、本書は、部落・部落外を超えた「若者たち」に対して、「部落問題と向きあう」ための可能性として次の二点を具体的に提起するのである。「〈人の魅力という可能性〉」と「〈構造的・量的な把握〉」である。前者は「部落問題と向きあう『個人』の生のありようを、物語として発信すること」であり、後者は「ある程度の量をもって部落問題の現状を語ること」（245頁）である。これら二つの啓発の戦略（性）について、先の象限にあてはめると、編著者の問題意識にもとづく本書が、いかなる（世界）に対していかなる効果を期待しているのかがよく理解できる。

【第1象限】と【第2象限】については、「当事者」も「非当事者」もお互いの世界を理解することに向けて「〈人の魅力という可能性〉」＝当事者のカムアウトを対応させている。また、【第3象限】と【第4象限】、すなわち「当事者」も「非当事者」もお互いに自らが置かれている状況すら知らないことを解消するために、「〈構造的・量的な把握〉」＝量的調査を対応させるのである。このことから、本書それ自体が一定の戦略性をもった「啓発の書」であることがわかる。本書に所収された各人の証言は、それぞれ読み応えのある貴重なものである。また、編著者たちがわかりやすく提示しているマクロデータも、現状の立ち位置を理解するうえで欠かせないものである。

「部落」という概念すら知らない、一九九〇年代以降に生まれた若者たちが自らの置かれている状態を認識するためのひとつの「道標」として、本書は読まれるだろう。彼・彼女たちが「あれもあるし、これもある」という読者から、「あれもないし、これもない」といえる読者へと成長を促していくことこそ重要であり、本書が意図していることでもある。

（解放出版社刊、二〇一四年二月、二〇〇〇円）

本の紹介

黒川 創著 『京都』

渡辺 毅
(穀雨企画室代表)

連作小説集の最初的一篇は、「喫茶フォックス」の店主が、女性客に道を訊かれる場面から始まる。「石峰寺には、ここからどうやって行けばいいでしょう？」

「あ、若冲さんのお寺やね」と応じ、店主は丁寧に道順を教える。まっすぐ行つて踏切を渡り、ちよつと行くと標識がある。そこを左に曲がつて山のほうへ歩いていけば「どんつきが、石段ですわ」。

この作品の表題は「深草稻荷御前町」。伏見稻荷大社の門前に実在する地名である。現地に足を運び、作品の記述と照らし合わせてみれば「喫茶フォックス」はこのあたりと、おおよその位置を特定することもできる。そこから店主に教えられた通りに十五分ほど進めば、伊藤若冲の五百羅漢で知られる黄檗宗石峰寺に、なるほど確かに辿り着く。

もちろん「喫茶フォックス」は架空の店だが、著者は、作中の人々が暮らし、行き交った場所のすべ

てを實在の場所になぞらえ、現実の京都地図の上に精確に刻印していく。その姿勢は連作全体に一貫している。例えば二篇めの「吉田泉殿町の蓮池」。ここで描かれる一条通鞠小路界限の地理的記述にはほぼ寸分の狂いもない。四篇めの「旧柳原町ドンツキ前」には河原町通塩小路北西角の下宿屋が登場するが、この立地点ならでは具体的な諸条件を抜かりなく考慮し、間取りや陽当たりまで精密に描いている。

「深草稻荷御前町」「吉田泉殿町の蓮池」「吉祥院、久世橋付近」「旧柳原町ドンツキ前」。この四篇を併せた作品集を、著者の黒川創は『京都』と題した。

「どうやら被差別部落を作品の舞台にしているらしい」と、書評の依頼を受けたさいに聞かされた私は、中味を読む前にまず連作それぞれを題名を見て、「旧柳原町」は崇仁地区が舞台だとすぐ察した。かつてドンツキと大書した

看板がランドマークのように存在した旧柳原町は、京都市内最大規模の被差別部落、崇仁地区以外ではあり得ない。残る三篇については、「部落を作品の舞台にしている」との先入観ゆえ、最初の「深草」はたぶん竹田部落にも関わる物語だろう、三つめのは吉祥院か久世か、あるいは双方の部落に關わる物語だろうと推測。「吉田泉殿町」だけは、部落とどう關わる物語なのかと訝しんだのだが、いずれにせよこれらは中味を読む前に思ったことに過ぎない。

読んでみると、被差別部落を作品の舞台にしているというのは、半分は当たつていて半分は外れていた。最初の「深草」は、在日朝鮮人が主人公の物語であつて、部落の話ではない。もつとも、主人公の妻は部落出身者と思しい。「吉田泉殿町」。これも部落の話ではないが、作品の舞台から少し離れた田中部落に言及する箇所がある。「吉祥院、久世橋付近」は、推測を裏切って部落とは無関係な話。そして「旧柳原町」には、被差別部落の人々の生きざまが、ときにはライフヒストリーを辿るかのよう描かれている。いずれにせよ著者は、部落を描

くとなればそれなりに手を抜かず描いている。だが、部落を描くことそのものはどうやらテーマではない。著者には描きたい、より大きなものがある。それを表現する上で必要だから、部落を描いている。部落だけではない。在日朝鮮人を、あるいはヤクザを描いている。これはそういう小説集なのである。

では黒川が真に描きたかつたものは何かと云えば、京都という町そのものなのである。だから作品集のタイトルも、大上段に構えた『京都』。それを四つの物語を紡いで表現した。しかも黒川の京都は世間に広く流布する表の顔の京都ではない、という点がミソである。表の顔ではない別の顔の京都を描く：この連作小説集に通底するテーマは、ほぼそれに尽きると云つて過言ではない。

何しろ京都には歴史と伝統が圧倒的に集積している。京情緒だとかみやびだとか絶大なイメージが付与され、人々を魅了してやまない。それが京都の表の顔。東京あたりに暮らしていると、この表の顔の目鼻立ちばかりに気をとられて、この町に別の顔があることになかなか思いが及ばない。それは

私も、まあそうだろうなあという気がする。自分がもともと東京人なので、東京人の多くが京都の表の顔だけを感じて「素敵な町ねえ」などと云ってしまいがちなことを、私はそれなりにわきまえている。メディアを通じて日々全国へ、主として東京へ向けて発信されているのは、歴史、伝統文化、情緒などを符牒にした表の顔の京都ばかりで、しかもその情報量が尋常でないという現状に鑑みれば、それも仕方ないことだろう。けれども、京都にだって表の顔とは別の顔がある。裏の顔、とまでは云わないが、少なくとも京情緒やみやびとは一見無縁な生活世界がこの町の内部にはずっと横たわっていて、今もある。そのことを知っている、しかもそこに愛着をさえ感じている人間からすれば、表の顔ばかりがそれこそ大きな顔をしていることに抵抗したいような気分になり、裏側に隠れた別の京都を描くことに精力を傾けたくなつたとしても、もつともな話である。

要するにそれだけの理由で黒川がこの連作小説集を書いた、と云ってしまうのはやや乱暴に過ぎるようでもあるが、いやいや十分な理由だとも思えて、そうすると「深

草稻荷御前町」の冒頭の場面は、なかなか象徴的である。石峰寺という京都の人気スポットへの道順を尋ねる女性客は、表の顔の京都に魅かれる存在の典型。これを邪険に扱うでもなくむしろ鄭重にあらうた上で、喫茶店主は、京都の表の顔とは無縁な生活世界の中へ、物語の中へ、ゆっくりと動き出す。ここから、表の顔ではない別の顔をした京都の時間が、四つの物語の中を流れ始めるのである。

「深草稻荷御前町」の主人公は四十代の喫茶店主である。彼は、川べりの貧しい在日朝鮮人の家に生まれた。やんちゃな仲間と過ごした少年期。やがて被差別部落出身の女と恋愛するが、相手の親は交際に反対する。あなたが朝鮮人だから反対するんじゃないかと、貧乏だとか学歴がないとか、そういうことのつらさを痛いほど知っているから、娘をあなたへやるのは心配だ、と。そこを押し切り結婚したが、結局うまくいかなかった。離婚して十六年。かつての仲間は、ある者はまざまざ出世し、ある者はヤクザになり、ある者は自死し、ある者は昔とあまり変わらない。

「吉田泉殿町の蓮池」の主人公は幼時に過ごした場所の記憶を手繰り寄せる。それは四十年前。彼は小学生。両親と、米屋を営む祖父と暮らしていた。百万遍では連日のように学生デモが繰り広げられ、西部講堂の前には蓮池があった。ある日そこで同級生が溺死したが、まるで事故の痕跡を封印するかのように、ほどなく蓮池は埋め立てられる。義父母との生活に疲れた母は、息子を連れて近くのアパートに別居し、夫の訪れを待つ。だが夫つまり主人公の父親は、己れの関心事にかまけて、妻子のもとへ来る気配はなく…。

「吉祥院、久世橋付近」。四十年代後半の女が、電鉄会社の苦情処理センターで働きながら、久世橋を望む吉祥院の団地で暮らしている。若いころ娘を連れて離婚したが、その娘も結婚して家を出て、いまは老猫と暮らしている。その猫が死んだ。ペット葬儀屋が茶毘設備を積んだ車でやってくる。女はふと葬儀屋が、昔の恋人だと気づく。あのころ男はヤクザの世界に片足突っ込んでいた。その後を聞けば、男はやっぱヤクザになつていた。そしていまもカタギにはならず、本物のヤクザにはすつか

り世智辛くなった社会の片隅で、ペット葬儀屋になりすましている。「旧柳原町ドンツキ前」の主人公は印刷会社の営業職。平安遷都千二百年が謳われていたころ、古地図の出版を企てた版元から「非人小屋」の文字を画像処理して消してほしいと依頼される。文字が記載されていたのはいまの東七条、崇仁地区あたり。その界限は主人公の男にとつて、消えることのない、若かった日々の記憶とともにある場所…。

四つの物語が描き出すのは、京情緒とかみやびとかいったものとは無縁でも、それぞれに喜びや哀しみや痛みを秘めて十分に抒情的な生活世界。しかもなおかつそこは京都なのである。表の顔の京都ばかりに気をとられていく人々には見えないかもしれないが、被差別部落があり、在日朝鮮人が暮らし、暮らしたの垢の染みついた中年男や中年女が、過去の後悔をささやかに引きずりながら日々をやり過ごしている、そんな生活世界がこの町にはあり、そこもまた京都なのである。著者が執念深く、「そこもまた京都」を描くため連作全体を通じ

て貰いた方法……。私は最初のほうで次のように述べておいた。著者は、作品の主人公たちが暮らし、行き交った場所をすべて実在の場所にさざらえ、現実の京都地図の上に精確に刻印していく、と。

例えば「吉祥院、久世橋付近」で、主人公の出勤までの道のりを、著者は次のように描写してみせる。「団地脇のバス停『吉祥院長田町』から、北行きの市バスに乗る。この朝の時間、道路は混んでいて、八つ先のバス停『阪急西京極』まで、三〇分近くかかることもある。そこで降り、花屋町通りを東に歩く。道路の左手に、友禅文化会館があり、葬儀ホールがあり、コーヒーストップがあり、ファミリールレストランがある。(中略)これらの先に、五階建てのくすんだビルが見えてくる。」

こうした「場所」のリアリティが四篇すべてに満ち満ちている。それが、架空の存在であるはずの登場人物たちにさえ実在感を与える。表の顔とは別の顔の京都を、抽象的な概念としてではなく、具体的な実感として受け止めてもらわねば、作品集の存在意義自体が揺らぎかねないとも云わんばかに、黒川は「場所」の実在性に

固執する。

被差別部落は、それ自体を描くことが主題ではなく、京都の別の顔を描くために物語の舞台に採用された典型に過ぎない。しかしこれをもまた黒川は、「場所」の実在性にこだわって、手を抜くことなく精確に描く。

「塩小路通りをはさんで、『ドンツキ』靴靴店の筋向かい、北側の並びに『中野履物店』があった。市電が河原町通りを南下してきて、『ドンツキ』前の交差点で西へと右折し、この店の前を過ぎていく。すぐそばの高瀬川の細く澱んだ流れを越えたところで停留所『塩小路高倉』に停まって降車客を降ろし、また発車して、終点『京都駅前』まで走っていく。」

「江戸時代、このあたりの地域は『柳原庄』と呼ばれていた。もとは鴨川西岸の五条橋下流にあった六条村が、さらにもう少し下流、この七条通り以南の柳原の地に移転させられたのは、一八世紀初めのことだった。／六条村は、皮革業と、犯罪人の処刑や捜索にあたる警刑吏役を主な生業としてきた村だった。この身分を秀吉の政權は『皮多』と呼んでいたが、江戸時代なかばごろには京都でも『穢多』

と呼ぶことが多くなる。」

いずれも「旧柳原町ドンツキ前」からの引用である。この四つめの物語は、市役所で中小企業診断士をしていた父に連れられて、幼い時分からこの町の「中野履物店」に入りしていた主人公が、高校時代から大学時代にかけてこの履物店に下宿し、そこで出逢いあるいは別れた人たちの思い出を後年になって顧みる、という体裁をとっている。崇仁という地域が繰り返具体的描写され、柳原銀行のことや米騒動のことなど、被差別部落として歩んできた地域の歴史についても少なからぬ紙幅を費やしている。履物店の内儀は京都府下亀岡の部落から嫁入りしてきた人で、彼女の来し方は、部落の女性のように綴られている。内儀が、自らの育った農村部落に比して荒っぽいところのある崇仁の土地柄に、いくらか嫌悪感を抱いたことなども語られる。「裏の高瀬川の流れに、ふとんを捨ててしま

う人までいる。ヤクザな言葉づかいで、『わしは七条や』とか(中略)ここの土地柄を、ひとを脅すのに使おうとする人もいる。こういうのが、いやだった……」。

下宿屋にはいつとき主人公より若い男が暮らしていた。人懐っこい若者だったが、女性を騷りものにする所業を重ねた挙句、婦女暴行罪で少年院送りとなる。この若者も崇仁部落のいわゆる「むらの者」。若者には、幼児を抱えたシングルマザーの姉がいて、数年後に主人公が再会したとき、若者が少年院を出てからまたぞろ同じような罪を犯し、今度は刑務所に入られたと聞かされる。そして主人公とこの姉とは、なりゆきのようになり、あるいは当然そうなることが判りきっていたかのように、いずれは立ち消えることになるであろう、男と女の関係を結ぶのである。

作品の舞台となっている被差別部落を、手を抜かず丹念に、精確に描くことで、人間が「場所」の中で「場所」に囚われて生きていくことの切なさや、浮き彫りにする。「旧柳原町」は、そんな抒情的な青春小説でもある。崇仁部落の叙述がいささか説明的すぎるようにも思われるが、これは大半の読者が、京都の表の顔しか知らない人たちであることを意識した上での、京都の別の顔、すなわち被差別部落なるものについての懇

切丁寧な情報提供という側面もあるであろう。

ところで、被差別部落そのものを描くことは主題でなかったとしても、著者が、表の顔とは別の顔の京都の最も象徴的な典型として部落を選択したという点は、やはり押さえておかねばなるまい。要するに、表側から見て裏側に隠蔽されてしまう、その最たるものが部落なのである。単に、表の顔の陰に入っただけではなく、部落の場合はこのようではなく、部落の場合はいくら意図的に隠蔽され、そして「あった」ことが「ない」ことにされてしまう。著者はそれに違和感を覚えている。「旧柳原町」が以下のような哲学的な書き出しなのも、そのためであろう。

「『ない』という言葉の過去形は、『あった』である、と言う人がいた。たしかにそうだ。『ない』と言うのは、かつてそこに何かがあった』ことを知る者だけである。反対に、『あった』と声明することは、いまはもう『ない』のだ、という事実の認識を含むだろう。」

を地図から抹消して「ない」ことにしてしまえば、「あった」というそのことはどうなってしまうのか。著者がとった態度は、「あった」ことを物語を通じて、現実の地図上に、精確に刻んでいくというものであった。ここには黒川の、彼なりの部落問題に対する構え方を見てとれるという云い方も可能だろう。だが私は、わざわざそんなふうにならなくてもよかろうと思う。黒川にとつての主題はあくまで、京都という町において、表の顔の陰に隠されがちな別な顔としての被差別部落を、これもまた京都であるところの一つの生活世界として描く、という点にあったとしたい。

「吉田泉殿町の蓮池」における被差別部落への言及は、その意味からすると、やや余計な印象を受ける。主人公が幼い日々を過ごした京大西部講堂裏、鞠小路通界隈の生活世界は、別の顔の京都、として十分に抒情的に描かれているのだが、もしかすると著者は、この生活世界が、表の顔の京都の典型と云えなくもない京大になまじい隣接しているゆえに、別の顔の京都としては説得力に欠ける、

とってしまったのかもしれない。祖母に連れられ歩いて三十分かけてたまに行く公設市場の西側に、田中の部落があつて云々という記述を持ち出し、朝田善之助の回想録の引用までしている。だがどう読んでもこの田中部落のくだりは、西部講堂裏の生活世界を描いた一篇の中では余録でしかない。京都の別の顔には部落、あるいは在日朝鮮人やヤクザといった類いの、マイノリティやアウトローを据えないと、何となく収まりがつかないという気分には、たぶん陥っていたのである。

さて、冗漫な文章を連ねてきた。そろそろ終えようと思うが、文句をつけて終えるのは後味がよくないさそうなので、最後に、黒川創の小説家としての技倆に感じ入った箇所を指摘して筆を擱くこととしよう。

それは四篇め「旧柳原町ドンツキ前」のラストシーン。連作小説集全体をも締めくくる場面。履物屋に下宿していた主人公は、男と女の間柄になったシングルマザーの女と、示し合せて旅に出る。ときは盃蘭盆、訪ねた先は丹後の伊根。つまり小説集『京都』は、最後の最後に京都の町の枠外に出

てしまうのである。一夜を共にした二人は、早朝、海辺に立って、精霊舟の舟出を見送る。

「美雪は、おかつ髪に手をかざし、その様子を見ている。こちらを振りむいて、にっと笑い、また舟のほうへと目を戻す。／昨夜行きついた灯台が立つ岬の沖を、精霊舟を積んだ漁船はゆっくりと左へ回りこみ、その向こう側へと消えていく。」

この終わり方に技倆を感じる理由を、どうも理路整然とは説明できそうにないが、つまりこういうことである。京都という生活世界に囚われて暮らしている人たちにしても、たまにはふつと京都を離れて、どこかの岸辺で海を眺めていることもあるのである。黒川創が、頑なに京都という町の枠内で物語を完結させようとせず、こんな尻切れトンボみたいな場面で最後を締めくくってくれたのを、巧い作家だなあ、と、そう思っただけである。

(新潮社刊、二〇一四年一〇月、一八〇〇円)

一残された課題を総括すべき時— 北口末広

ひょうご部落解放 153 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2014. 6) : 700円

特集 奨学金のあり方を問う

若者を借金地獄に追い込む奨学金制度は根本から改革を
佐野修吉／解放奨学金から奨学金を考える 編集部
部落解放同盟兵庫県連合会2013年度第54回支部長研修会
講演 大学生の部落観 なぜ、彼らは部落にマイナスイメ
ージをもってしまうのか 石元清英

追悼・大谷強前所長

惜別 ひょうご部落解放・人権研究所／大谷先生を偲
んで 石橋宏昭

ひょうご部落解放 154 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2014. 9) : 700円

特集 兵庫の障害者運動

「障害者差別解消法」の意義と兵庫県における今後の課
題 栗山和久／インタビュー 親戚や家族のように—「神
戸きょうだいの会」の45年 松村敏明・石倉泰三／イン
タビュー 生きづらさと疎外をなくしていくために 玉木
幸則／出生前診断をどう考えるか 姜博久／澤田隆司と
いう人 井奥裕之

仕事のおい まちのおい 1 皮から革へ、生活をかけた
営み 社納葉子

映画の紹介 「60万回のトライ」 (朴思柔・朴敦史監督)
藤井幸之助

部落解放 700 (解放出版社刊, 2014. 10) : 1,000円

特集 解放教育 教育実践はいかに教育政策を凌駕するか

部落解放 701 (解放出版社刊, 2014. 11) : 600円

特集 ヘイトスピーチと闘う

本の紹介

すぎむらなおみ著『養護教諭の社会学 学校文化・ジェ
ンダー・同化』 西田芳正／寺木伸明著『近世被差別民
衆史の研究』 八箇亮仁

米ファーガソンの黒人青年射殺事件の背景を考える 人
種分離と経済格差、警察・司法による経済的差別 柏木
宏

入門 差別と表現をかんがえる 5 “超”放送禁止落語会差
別事件 編集部

部落解放 702 (解放出版社刊, 2014. 12) : 600円

道徳の教科化に向き合う 森実

みんなの仕事・わたしの仕事 2 黙々と編み続けるとい
う仕事 籾職人・藤堂明男さん 社納葉子

幕府を震撼させた「長吏」の団結 武州鼻緒騒動研究の
検証に向けて 松浦利貞

本の紹介 黒古一夫著『井伏鱒二と戦争—『花の街』か
ら『黒い雨』まで』 強靱に戦争を生き抜いた作家 河村
義人

警察史のなかの追捕と糾弾権 川元祥一

文化力で差別と闘う 「仲良くしようぜパレード」を立
ち上げた思い 申請英

回顧 教科書無償運動 1 連載をはじめるとあたって 村
越良子, 吉田文茂

部落解放 703 (解放出版社刊, 2015. 1) : 600円

特集 差別禁止法と救済法

これまでの閣議決定を財産に 差別禁止法と人権救済法
(人権委員会設置法) の関係について 内田博文／ヘイ
ト・スピーチの憲法論 差別煽動を処罰して表現の自由
を守る 前田朗／障害者差別解消推進法から差別禁止法・
救済法を考える 池田直樹／半世紀にわたる法制定運動
の悲願 差別撤廃にかかわる実体法の「禁止法」と組織
法の「救済法」 奥田均

土地差別とその背景 Y住宅販売会社差別調査事件の糾
弾会を終えて 池田清郎

警察史のなかの追捕と糾弾権 2 中世非人と検非違使 川
元祥一

回顧 教科書無償運動 2 運動がはじまるころの長浜 村
越良子, 吉田文茂

部落解放研究くまもと 68 (熊本県部落解放研究会刊,
2014. 10)

特集 梅原眞隆と融和運動

梅原眞隆と融和運動 太田心海

史料紹介 詫摩郡春竹村内原村関係史料 橋口和孝, 山本
尚友

熊本の被差別部落史編さん通信 被差別部落の信仰と唐
崎神社 山本尚友

ゆいばる 14 (姫路市人権啓発センター刊, 2014. 8)

新しい視点から部落問題を考える 石元清英

リベラシオン 155 (福岡県人権研究所刊, 2014. 9) : 1,
000円

特集 福岡部落史研究所創立から40年

世界遺産に『全国水平社宣言と関係資料』を～福岡部落
史研究会創立40周年の節目に～ 森山沾一／「水平社を
学びつつ、ムラの子として起こす」とは うんのまなぶ
／松本治一郎・井元麟之研究会の活動と今後の課題 松
本治一郎・井元麟之研究会／海外人権・スタディツアー
の10年 柳井美枝／県内市町村住民の人権意識調査結果
から見える課題 堀内忠／田川浄福寺の成立をめぐる
安蘇龍生／福岡部落史研究会～福岡県人権研究所40年
の歩み／機関誌総目次 (創刊号～121号『部落解放史・ふ
くおか』、122号～『リベラシオン—人権研究ふくおか
—』)

ルシファー 17 (水平社博物館刊, 2014. 10) : 500円

報告

2013年度第1回公開講座 「水平社と水平社の交流につい
て」 徐知延, 徐知伶／2013年度第2回公開講座 「アート
と人権—輝いて生きる—」 田仲敦三／全国水平社創立
宣言を世界の記憶に 水平社博物館

歴史学研究 923 (歴史学研究会編, 2014. 10) : 741円

書評

朝治武『差別と反逆—平野小剣の生涯—』 関口寛／吉
村智博『近代大阪の部落と寄せ場—都市の周縁社会史—』

杉本弘幸

千里図書館で同和地区の問い合わせ 佐佐木寛治

季刊人権問題 377 (兵庫人権問題研究所刊, 2014. 10) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 15 全国から八鹿へ 2

暴行翌日の「八鹿病院激励」、「朝来町調査報告書」、「八鹿高校事件調査報告書」のことなど 雑賀光夫／八鹿高校での集団リンチ事件について 山中邦夫

振興会通信 119 (同和教育振興会刊, 2014. 11)

同朋運動史の窓 25 左右田昌幸

少数点在部落の現状に学ぶ 忍関崇

真宗 1327号 (真宗大谷派宗務所刊, 2014. 10) : 250円
人の世に熱あれ人間に光あれ 25 真宗大谷派同和関係寺院協議会発足40年を迎えて 菊池成明

信州農村開発史研究所報 129 (信州農村開発史研究所刊, 2014. 9)

小林收先生への質問 斎藤洋一

信州農村開発史研究所報 130 (信州農村開発史研究所刊, 2014. 12)

140年余り前の「身元調査」 斎藤洋一

史料紹介 延宝2年の「百姓困窮仕候付御訴訟」 市葉藤哉

身同 34 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2014. 9) : 1,000円

大谷派における解放運動の歴史と課題 問われるもの、願われるものとしての解放運動—糾弾への呼応 2 訓霸浩

地域と人権 1143号 (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 12. 15) : 148円

月刊『宝島』特集の波紋 問われる「解同」の組織倫理と人権行政のあり方

月刊地域と人権 367 (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 11) : 248円

資料 中西和久氏からの抗議に対する見解 全国演鑑連幹事会

地域と人権京都 678号 (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 10. 1) : 150円

「竹田・深草地区」は、これで良いのか? 終 中川正照
同和奨学金返還問題の検討 41 川部昇

地域と人権京都 679号 (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 10. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 終 川部昇

地域と人権京都 681号 (京都地域人権運動総連合刊, 2014. 11. 15) : 150円

京都市の同和行政・同和教育の終結への現状と課題 京都地域人権運動連合会京都市協議会

地域と人権京都 682号 (京都地域人権運動総連合刊, 2014. 12. 1) : 150円

京都市の同和行政・同和教育の終結への現状と課題 2 京都地域人権運動連合会京都市協議会

地域と人権京都 683号 (京都地域人権運動総連合刊, 2014. 12. 15) : 150円

京都市の同和行政・同和教育の終結への現状と課題 3

京都地域人権運動連合会京都市協議会

であい 630 (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 9) : 150円

人権のまちをゆく 68 山口県宇部市 海に沈んだ長生炭鉱

人権文化を拓く 202 「私はあなたの心の洗濯機ではない」～2014年1月20日国連障害者権利条約批准～ 一木玲子

であい 631 (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 10) : 150円

人権のまちをゆく 69 浅草「新町」フィールドワーク
弾左衛門ゆかりの地を歩く

人権文化を拓く 203 “ばあちゃん”のノート 韓文亨

であい 632 (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 11) : 150円

人権文化を拓く 204 原発再稼働は要援護者にとって不公平 アイリーン・美緒子・スミス

であい 633 (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 12) : 150円

人権文化を拓く 205 にんげんの尊厳の輝きを求めて 中村純

同和教育論究 35 (同和教育振興会刊, 2014. 7) : 1500円

中村甚哉と真宗信仰 奥本武裕

教団内における「寺中」差別の実態 林史樹

「従軍慰安婦」問題からみる日本の差別構造～橋下徹「慰安婦」差別発言を通して～ 小川眞理子

福島差別～自主避難者のおかれている現実と差別～ 麻田弘潤

『差別事件 糾明のための方途』改定について 嶋津弘隆
史料紹介 近世真宗差別問題史料 (閑話休題編) 一本願

寺の日記記における平行記事について— 左右田昌幸

書評 『自叙で綴る梅原眞隆の生涯』 神戸修

ヒューマンJournal 210号 (自由同和会中央本部刊, 2014. 9)

部落解放運動40年を振り返って 13 同和事業の見直しへ 灘本昌久

ヒューマンライツ 320 (部落解放・人権研究所刊, 2014. 11) : 500円

各地の人権研究所の取り組み 4 焼失を免れた多くの史料をもとに調査研究を進める 吉田文男

被差別部落の歴史 前近代編 11 寺木伸明

ヒューマンライツ 321 (部落解放・人権研究所刊, 2014. 12) : 540円

特集 「部落地名総鑑」差別事件を改めて考える

「部落地名総鑑」差別事件とはどのような事件であったのか 山中多美男／終わらない「部落地名総鑑」差別事件

北口末広／「部落地名総鑑」差別事件、何が取り組まれ、何が未解決なのか—今なお続く「合法状態」

奥田均／インターネット上の差別問題にどう対処するか 松井修視

被差別部落の歴史 前近代編 12 寺木伸明

走りながら考える 160 来年は同和对策審議会答申50年

昭和史の中のある半生 18 小森龍邦

解放新聞広島県版 2154号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 11. 25)

昭和史の中のある半生 19 小森龍邦

解放新聞広島県版 2155号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 12. 5)

昭和史の中のある半生 20 小森龍邦

解放新聞広島県版 2156号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 12. 25)

昭和史の中のある半生 21 小森龍邦

語る・かたる・トーク 235 (横浜国際人権センター刊, 2014. 9) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 32 二度と繰り返さないため40年前に始まった懇談会 外川正明

語る・かたる・トーク 236 (横浜国際人権センター刊, 2014. 10) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 33 批判の応酬から小中の連携へ 外川正明

語る・かたる・トーク 237 (横浜国際人権センター刊, 2014. 11) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 34 保護者や保育士の方々から学んだこと 外川正明

語る・かたる・トーク 238 (横浜国際人権センター刊, 2014. 12) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 35 「こだま学級」の子どもたちと 外川正明

「いじめ」に思う 消えない心の傷～過去を振り返って～ 1 小橋和泉

かわとはきもの 169 (東京都立皮革技術産業センター台東支所刊, 2014. 9)

靴の歴史散歩 114 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学人権問題研究室紀要 68号 (関西大学人権問題研究室刊, 2014. 12)

特集 国際ワークショップ 戦争と歴史認識—歴史教育学の可能性—

講演1 “戦争を伝える”歴史教育の実際—新たなる可能性を求めて— 金田修治／講演2 ドイツの歴史教育の基本的特徴—歴史授業における知識の伝達と判断力の育成— マルティン・リーパッハ

朝鮮語新聞「毎日新報」(朝鮮総督府機関紙)に掲載された「国語」欄の歴史の変遷(1939年～1944年) 熊谷明泰

きょう☆COLOR 創刊号 (京都市人権文化推進課刊, 2014. 11)

見て・知って人権 京の学生が行く 1 ツラッティ千本

京都部落問題研究資料センター通信 37号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2014. 10)

本の紹介

八木聖弥著『近代京都の施薬院』 田中和男／小林丈広編著『京都における歴史学の誕生—日本史研究の創造者たち—』 田良島哲

収集逐次刊行物目次 (2014年7月～9月受入)

クロノス 36 (京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2014. 11)

イギリス女性生活誌 36 夜間学校に学ぶ—新たなキャリアを開く途として— 松浦京子

グローブ 79 (世界人権問題研究センター刊, 2014. 10)

創立20周年の意義 上田正昭

部落差別を考える—奈良県立同和問題関係史料センター20年の取り組みから— 井岡康時

グローバル時代の学校と教員 伊藤悦子

人権の“館” わだつみのこえ記念館 仲尾宏

藝能史研究 206 (藝能史研究会刊, 2014. 7) : 1,800円

特集 藝能史研究の過去・現在・未来—史料としての映像記録—

国際人権ひろば 118 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2014. 11) : 350円

特集 国際基準にてらした日本の人権状況

社会科学 104 (同志社大学人文科学研究所刊, 2014. 11) : 1,000円

シンポジウム「日本の「戦後史」と東アジア」

引揚者と戦後日本社会 安岡健一／ヨイトマケの唄、ニコヨンの歌—戦後失対労働者の存在形態と社会意識 杉本弘幸／沖繩復帰前後の経済構造 櫻澤誠／1980年代以降日本における 中国人新移民について 宋伍強

人権と部落問題 863 (部落問題研究所刊, 2014. 10) : 600円

特集 環境問題とくらし

部落問題解決に向かって—親子の証言—

今に生きる貴重な体験 東展世／部落問題と自分 東翔太郎／世代を紡いで 東大地

文芸の散歩道 夏目漱石作『坊っちゃん』と主人公の「田舎」観 水川隆夫

人権と部落問題 864 (部落問題研究所刊, 2014. 11) : 600円

特集 高齢者のくらし

文芸の散歩道 村岡花子—決戦下のアンビリャブル! — 秦重雄

人権と部落問題 865 (部落問題研究所刊, 2014. 12) : 600円

特集 基地問題のいま

文芸の散歩道 明治39年の藤村とその周辺 川端俊英

人権と部落問題 866 (部落問題研究所刊, 2015. 1) : 600円

特集 メディア問題のいま

メディアは再び戦争を招き寄せるのか—「朝日バッシング」がさらけ出した問題を考える— 桂敬一

本棚 丹波正史著『部落問題解決への理論的軌跡』 奥山峰夫

文芸の散歩道 松木淳詩歌集『荊の座』—人間性の高さにおいて万人の心をゆさぶる歌人— 桑原律

じんけんぶんかまちづくり 45 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2014. 10)

人権文化のまちづくり講座 「よく生き合うとは～『同和はこわい考』から27年～」 (講演: 藤田敏一)

あなたの大切なものはなんですか？—東日本大震災の避難者支援をすること— 佐藤淳子

サッカー指導を通じて、改めて見えてきた人権—指導者は子どものサポーター、子どもは指導者のサポーター— 船越正忠

部落に生まれ、部落に育って、今思うこと 橋本祐磨
棄民と言われた人々—ハンセン病療養所の中に生きて— 荒井玲子

外国にルーツをもつ人々に学ぶ、グローバル時代の子育て—県内外の聞き取り事例から— 鳥取県人権文化センター

解放新聞 2684号 (解放新聞社刊, 2014. 9. 22) : 90円
今週の1冊 『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策と民衆』 (大橋幸泰著)

解放新聞 2685号 (解放新聞社刊, 2014. 10. 6) : 90円
今週の1冊 『被差別部落の暮らしから』 (中山英一著)

解放新聞 2687号 (解放新聞社刊, 2014. 10. 20) : 90円
ぶらくを読む 91 刑吏を担う被差別民 日本とヨーロッパ 湧水野亮輔

解放新聞 2688号 (解放新聞社刊, 2014. 10. 27) : 90円
ノンフィクションからの警鐘 1 山本茂実『あゝ野麦峠』 音谷健郎

今週の1冊 『アフリカ系アメリカ人という困難』大森一輝著

解放新聞 2690号 (解放新聞社刊, 2014. 11. 10) : 90円
今月の本@ランダム

藤田一良著『弁護士・藤田一良—法廷の闘い』/金尚均著『ヘイト・スピーチの法的研究』/遠藤比呂通著『希望への権利 釜ヶ崎で憲法を生きる』

解放新聞 2691号 (解放新聞社刊, 2014. 11. 17) : 90円
部落解放研究第48回全国集会から 2 部落の伝統と芸能 山路興造

解放新聞 2693号 (解放新聞社刊, 2014. 12. 1) : 90円
ぶらくを読む 92 豊穰を希求する動物供犠は誰が執行するのか 湧水野亮輔

解放新聞 2695号 (解放新聞社刊, 2014. 12. 15) : 90円
ノンフィクションからの警鐘 2 『ルポ 貧困大国アメリカ』 (堤未果著) 音谷健郎

解放新聞 2696号 (解放新聞社刊, 2014. 12. 22) : 90円
「非公開情報に当たる」と最高裁 「鳥取ループ」の地域総合センター—一覧表などの公開請求に

本の紹介

『女子学生、渡辺京二に会いに行く』 (渡辺京二×津田塾大学三砂ちづるゼミ) / 『折口信夫 魂の古代学』 (上野誠著) / 『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』 (マララ・ユスフザイ著)

解放新聞大阪版 2012 (解放新聞社大阪支局刊, 2015. 1. 5) : 70円

「部落地名総鑑」発覚から40年 上 赤井隆史

解放新聞改進黨 455号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2014. 9)

『京都市同和教育方針』50年を迎えて 1

解放新聞改進黨 456号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 20

14. 10)

『京都市同和教育方針』50年を迎えて 2

解放新聞改進黨 457号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2014. 11)

『京都市同和教育方針』50年を迎えて 3

解放新聞改進黨 458号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2014. 12)

『京都市同和教育方針』50年を迎えて 4

解放新聞京都版 997号 (解放新聞社京都支局刊, 2014. 9. 20) : 70円

ハンセン病問題と「関西」 2 無癩県運動があった

解放新聞京都版 998号 (解放新聞社京都支局刊, 2014. 10. 1) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 崇仁から五条楽園へあるく 駅北コース 1

解放新聞京都版 999号 (解放新聞社京都支局刊, 2014. 10. 10) : 70円

歴史と人権 京都めぐり 市比賣神社から枳殻邸へあるく

解放新聞京都版 1001号 (解放新聞社京都支局刊, 2014. 11. 1) : 70円

本の紹介 矢吹文敏著『ねじれた輪ゴム』

解放新聞京都版 1005号 (解放新聞社京都支局刊, 2014. 12. 10) : 70円

50年前に作られた日本映画は障がい児をどう描いているか

解放新聞東京版 846号 (解放新聞社東京支局刊, 2014. 10. 15) : 93円

映画「ある精肉店のはなし」と私の解放運動 1 北出昭

解放新聞東京版 848号 (解放新聞社東京支局刊, 2014. 11. 15) : 93円

映画「ある精肉店のはなし」と私の解放運動 2 北出昭

解放新聞東京版 850号 (解放新聞社東京支局刊, 2014. 12. 15) : 93円

映画「ある精肉店のはなし」と私の解放運動 3 北出昭

解放新聞広島県版 2148号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 9. 25)

仏教の中の差別と可能性を問う—解放理論をふまえて— 知られていない『経典』の差別 中 小森龍邦

解放新聞広島県版 2149号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 10. 5)

仏教の中の差別と可能性を問う—解放理論をふまえて— 知られていない『経典』の差別 下 小森龍邦

解放新聞広島県版 2150号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 10. 15)

昭和史の中のある半生 15 小森龍邦

解放新聞広島県版 2151号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 10. 25)

昭和史の中のある半生 16 小森龍邦

解放新聞広島県版 2152号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 11. 5)

昭和史の中のある半生 17 小森龍邦

解放新聞広島県版 2153号 (解放新聞社広島支局刊, 2014. 11. 15)

収集逐次刊行物目次 (2014年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

朝田教育財団だより 21 (朝田教育財団刊, 2014. 11)
朝田善之助さんの先見性と哲学、勝三さんの遺志を継ぐ
松井珍男子

明日を拓く 105 (東日本部落解放研究所刊, 2014. 3) :
1,080円

特集 差別と向き合い、共生をめざす社会を手探りする
松島幸洋さん(東京都連葛飾支部)に聞く 部落民を名
乗り、部落民を伝えるということ 聞き手: スターディッ
ク・マーティンさん/多文化が進行する高校教育の現場
にいま必要なこと…外国につながる生徒たちの人権保障
はいま… 角田仁

本の紹介 内田龍史編著『部落問題と向き合う若者たち』
深田広明

IMADR-JC通信 179 (反差別国際運動日本委員会刊, 201
4. 10) : 750円

特集 国連審査と日本の人種差別問題

解放研究とっとり 第12号 (鳥取県人権文化センター
刊, 2010. 3) : 500円

『非人と他国御用』上～鳥取藩寛政10年「津山賈銀札事
件」を通して～ 田中真次

アイヌ民族問題へのアプローチ～身近な問題とするため
のいくつかの視座～ 池原正雄

一般社団法人「とっとり被害者支援センター」の取り組
みについて 田中完治

企業の社会的責任(CSR)と人権問題への取り組み～県
内企業へのアンケート及び聴き取り調査から～ 鳥取県
人権文化センター

実践報告 ひき算ではなくたし算で～障がい児・障がい
者と共に歩んだ十五年～ 植村ゆかり

解放研究とっとり 第13号 (鳥取県人権文化センター
刊, 2011. 3) : 500円

県東部の旧村に残された戸籍簿を読む―「明治三年式戸
籍」と壬申戸籍(補遺)― 伊藤康

『非人と他国御用』下～鳥取藩寛政10年「津山賈銀札事
件」を通して～ 田中真次

虐待防止活動10年の歩み―NPO法人子どもの虐待防止ネッ

トワーク鳥取(CAPTA)の取り組みを通して― 田村勲
再生ものがたり―「わかって欲しい!」に寄り添った関
わりを地域に拡げて 齊藤里依

労働再考: 収入・仕事量・自己実現―鳥取県内における
「労働」に関する意識調査から― 鳥取県人権文化セン
ター

解放研究とっとり 第14号 (鳥取県人権文化センター
刊, 2012. 3) : 500円

鳥取藩におけるお救い～非人制度の福祉的側面～ 堀江
駿

大正期鳥取県の部落改善政策の展開 西村芳将
障害青年の教育権保障をめぐる現状と課題～教育年限延
長の要求と特別支援教育～ 國本真吾

「あららら?」ふと気づいたら福祉畑だって 岸本美鈴
地域の大人として子どもたちにできること～子どもの育
ちや学びに関わって～ 田中朝子

続・労働再考: 職場の人権と「働きがい」～鳥取県内企
業のアンケート及び聴き取り調査から～ 鳥取県人権文
化センター

解放研究とっとり 第15号 (鳥取県人権文化センター
刊, 2013. 3) : 500円

実態調査を現代部落史の視点で読む～同和問題の負のス
パイラル～ 新井宏則

『全国水平社』創立90年～私たちが問われていることは
なにか～ 坂根政代

インターネット人権侵害の闇～私たちは今何をしなければ
ならないのか～ 今度珠美

ポルフィリン症との闘い～一日も早い難病指定をめざし
て～ 堀富美

相談業務を通じて私と向き合う 鈴木直子

災害と人権～東日本大震災に関わる鳥取県民の意識調査
から考える～ 鳥取県人権文化センター

解放研究とっとり 第16号 (鳥取県人権文化センター
刊, 2014. 3) : 500円

大正期鳥取県における融和政策の基調～岩切重雄の部落
改善論～ 西村芳将

事務局よりお知らせ

◇2014年度部落史連続講座(全6回)が無事終了しました。3月末には講演録が出来上がる予定です。

ご希望の方はメール・FAXにてご連絡ください。

◇次年度の講座については、次号でお知らせいたします。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分